

一、問い…「今」・「卑謙の言辞」とは。

1 竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛りなり。

教行信証 化身土巻 末 真宗聖典 第二版 472 頁

2 又『愚禿鈔』と題する選有り、同じく自解の義を述ぶる記たり。彼の文に云わく、「賢者の信を聞きて、愚禿が心を顕す。賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。愚禿が信は、内は愚にして外は賢なり」と云々 此の釈、卑謙の言辞を仮りて、其の理、翻対の意趣を存す。内に宏智の徳を備うと雖も、名を碩才道人の聞きに銜わんことを痛み、外に只至愚の相を現じて、身を田父野叟の類に侔しくせんと欲す。是れ則ち竊かに末世凡夫の行状を示し、専ら下根往生の実機を表する者をや。

嘆徳文 真宗聖典 第二版 902 頁

二、愚禿という名のりの意味

1 或いは僧儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す。予は其の一なり。爾れば已に僧に非ず俗に非ず。是の故に「禿」の字を以て姓とす。

教行信証 化身土巻 末 真宗聖典第二版 473 頁

2 破戒にして、法を護らざる者を禿居士と名く。・・・中略・・・

我涅槃の後、濁悪の世に、国土荒乱し、互に相抄掠して、人民飢餓せん。爾の時に、多く飢餓の為の故に、発心出家する有り。是の如きの人を、名けて禿人と為す。

大般涅槃經 大正藏經卷第 12 383～384 頁

三、「翻対の意趣」の真意……愚禿に開かれた仏道

然るに、煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。

教行信証 証巻 真宗聖典第二版 319～320 頁

四、真仏弟子の意義

1 「真仏弟子」と言うは、「真」の言は、偽に対し、仮に対する。「弟子」は、釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。斯の信行に由りて必ず大涅槃を超証すべきが故に、「真仏弟子」と曰う。

教行信証 信巻 真宗聖典第二版 278 頁

2 誠に知りぬ、悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まざることを、恥ずべし、傷むべしと。

教行信証 信巻 真宗聖典第二版 285～286 頁

3 「誠知」と等は、傷嘆の詞也。但し悲痛すと雖も又喜ぶ所有り、^{まこと}寔に是れ悲喜交流と謂う可し、「不喜」「不快」は是れ^{ちしょう}耻傷を顕す、定聚の数に入ると真証に近づく^{ひそか}と潜に自証を表す、喜快無きに非ず。

六要鈔 第三（末）信巻釈 真宗聖教全書 二 315 頁

五、愚禿の名のりと浄土真宗

1 「横超」は即ち願成就一実円満の真教、真宗是れなり。

教行信証 信巻 真宗聖典第二版 276 頁

2 ^{げどう}外道は「^{ちようせいふし}長生不死」、それから仏道は「^{ごんじようえんえ}欣浄厭穢」だと、これは純粋な仏道の根本精神です。そしてさらに浄土真宗は「現生不退」だと、こういうふう^にに安田理深先生がはっきり教えてくださった・・・・・・・・

『浄土真宗 一往生と不退一』仲野良俊著 東本願寺出版 184 頁